体験ドキュメント

子宮ガン

ンの治療は、副作用を抜きには語れない。ときには、命と引き換えに、大きな障害を残すこともある
値観は、人それぞれだ。ガンが治るなら、障害を背負っても構わない、という考えかたもある。だけど
の障害が、〝私らしさ〟を奪うほどのものなら――。私は、生きていることに価値を見いだせるだろうか

…生きるための私の選択

芥真木＝著　西山奈々子＝撮影

Oggi BOOKS

芥　真木

あくたまき・本名、平井真知子。1951年東京出身。高校在学中、17歳でマンガ家デビュー。19歳で手塚治虫氏主宰の『ＣＯＭ新人賞』受賞。現在はコミック原作者として活動すると同時にノンフィクションライター、家庭医学書の構成者も兼ねる。コミックの著作物は『離婚時代』(小学館)『銭狩り』(秋田書店)『私はカジノガール』(光文社)など多数。ノンフィクション、医学書の構成著作物として『間違いだらけの塾選び』(扶桑社)『ダイエット・バイブル』(光文社)『マインドコントロール・ダイエット』(小学館)『慢性腎不全の正しい知識』(南江堂)などがある。血液型Ｏ型。魚座。趣味は読書、海外放浪、カジノギャンブル研究、コンピュータアート。特技はピアノ演奏。色占いはプロ並み。ＴＶゲームは名人級と多趣味多才。

西山奈々子

にしやまななこ・静岡県出身。東京工芸大学卒業後、音楽専門誌でミュージシャンを中心とした撮影を手がける。アルフィー、ハウンド・ドッグとはデビュー当時からの付き合い。その他ツイスト、サザンオールスターズ、浜田省吾、松任谷由実、さだまさしなど多数手がける。現在は、人物インタビュー及びドキュメンタリー撮影など幅広い活動を行っている。撮影著作物にハウンド・ドッグ写真集『Dog shot』(マザーエンタープライズ)『薬師丸ひろ子写真集』(扶桑社)『もうひとつのALFEE STORY』『THE ALFEE STAGEPROJECT』(学研)『about myself 柳葉敏郎』(主婦の友社)その他。血液型Ａ型。水瓶座。趣味は、海外撮影旅行、語学の勉強。

アートディレクト　土屋直久＋大塚勤＋ya

編集　栗原千歳＋平井杉夫＋スタジオ・ジョーズ

子宮ガン　生きるための私の選択

1995年４月10日初版第１刷発行

著　者　芥　真木　西山奈々子

発行者　増井昌弘

発行所　株式会社小学館

〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2-3-1

編集☎03-3230-5561（ファッション編集部アドバトーリアル室）

業務☎03-3230-5333

販売☎03-3230-5739

印刷所　大日本印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁乱丁本などの不良品がございましたら業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写（コピー）をすることは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。

© Maki Akuta, Nanako Nishiyama 1995 Printed in Japan

ISBN4-09-342301-6

子宮ガン

…生きるための私の選択

芥真木＝著　西山奈々子＝撮影

ガンの闘病を通じ、私はたくさんの人々の愛と励ましを受け、
多くのことを学び、今、毎日を元気に暮らしています。
私の健康を救ってくださった医師の方々や
心を支えてくださった看護婦のみなさん、
私を育て、見守ってきてくれた父と母に
感謝をこめてこの本を捧げます。
そしてこの本が、同じ病気で苦しんでいる読者の方々への
少しでも希望と励ましのメッセージになることを
心から願っています。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

子宮ガン　生きるための私の選択・目次

第1章　ガン告知からの12日間 …… 7

入院、手術より先に、まず仕事を片づけたい。ガンを告知された私が、いちばん最初にこだわったこと。
もしこれがガンだとしたら、すごく足がはやいやつだ。だったらじたばたしても、始まらない。
どんな治療をしても、確実に治る保証はない。でも放っておけば、確実に命をなくす病気。
ごはんを抜いて1日かけて。苦痛はないとわかっていても、やっぱり検査は好きになれない。
0期で見つかった母のガン。2期まで進んだ私のガン。同じ子宮ガンでも、治療法や予後は大きく違う。

第2章　ガン治療の長く苦しい時間 …… 33

体質によって、ガン細胞の性質によって将来はさまざま。泣くのか笑うのか、今はまだわからない。
人の気持ちがわかったつもりで、実は何もわかってなくて。自分の思い上がりを学んだ日。
強そうな人がポッキリ折れたり、弱そうな人が意外に持ちこたえたり。ガンの告知はなかなか難しい。
診察、検査、治療の予定に追われる病院暮らし。仕事をしよう、のんびりしようなんて甘い考えだった。
近代医療の発展は、実験抜きには語れない。過去の積み重ねがあるからこそ、私は恩恵が受けられる。
肉を切らせて骨を断つ——。副作用や後遺症は避けられないガンの治療では、さじ加減が難しい。
ただでさえ薬に弱い私。ただでさえ副作用の強い抗ガン剤。行こうか戻ろうか、気持ちはふらふら揺れ動く。
抗ガン剤治療の拒否。そして、5日後の逆転劇。振り回される周囲は、たまったものじゃない。
カッと体が熱くなり、一瞬にはじける抗ガン剤は、まるで夜空に上がる花火のようだった。
体がねじ切られるような、激しい吐き気。そのあとに続いた、宙に浮くような陶然とした感覚。
病院暮らしのA to Zを、同じ病気の先輩に学ぶ。経験者のアドバイスは、なるほどと思うものばかり。

診察に手術説明、体の調整やら仕事の始末やらで、手術を控えた私は、目が回りそうに忙しい。
移動ベッドで、手術室に運ばれていく日。見つめられ、励まされ、今日の私は主役の気分。
近代的な手術室の中は〝怖さ〟よりは冷たさを。〝不安〟よりは寂しさを強く感じてしまう。

第3章　術後感染との闘いの日々 ―― 105

声も出せず、体も動かせない暗闇の中。痛みと音の感覚だけが、生きている証だった。
蛇や注射も、ときには死ぬことさえ怖くない私が、体から出ているたくさんの管に身震いしてしまう。
手術直後から空腹感を感じ続けて――。寝て見る夢は、あきれるくらい食べる夢ばかり。
術後1週間目からスタートした排尿訓練で、尿が出ないことに激しく動揺してしまった私。
自分の体が自由にならない恐怖と、自分の感情をコントロールできない恐怖におびえて。
命をおびやかす病だけが怖いわけじゃない。〝生命の質〟をおびやかす病も、私にとっては恐ろしい。
病気をして初めて味わった深い孤独感と絶望感。感情を爆発させた自分に驚く、もうひとりの自分がいた。
トラブルが起きたときにあぶりだされる、人の姿と愛情の量。私は、私の幸運を改めて感じて――。

第4章　生きるための私の選択 ―― 157

私のトレードマークは、肩から下げた尿バッグ。「平井さんのハンドバッグ」は、病棟の名物となった。
放射線治療のプラスとマイナス。障害は怖いけど、命も惜しい。究極の選択をせまられて――。
万に一つの珍しいタイプのガンだから、これからどうなるのか、先に何が待っているのかがわからない。
放射線をかける不安。かけない危険。どちらを選んでも、最終的には、人それぞれの人生観。
私はどうしても目の前の自由が欲しい。最低1年の猶予があれば、十分満足できるはずだから。
もし、退院できるなら。もし、家に帰れるなら。たくさんの〝もし〟をこの手につかめた日。

あとがき ―― 185

第1章

ガン告知からの12日間

25歳のときに大病して以来、体のあちらこちらが故障し、
それをなだめながら生きてきた私にとって、人生とは〝有限の時間〟である。
「やりたいことは、今すぐやらねば」そんな思いで走り続ける私の気持ちを、
大病をしたことのない人にわかってもらうのは、とても難しい。
そして、今また私はガンの告知を受けた。43歳。
〝ピリオドを打つのは早過ぎる〟という思いと、〝潮どきかな〟という思いが交差する。

入院、手術より先に、まず仕事を片づけたい。
ガンを告知された私が、いちばん最初にこだわったこと。

お昼をまわったというのに、私の名前はいっこうに呼ばれる気配がなかった。

大学病院は、受診待ちの時間が長い。

午後から仕事の約束があった私は、朝9時の受付30分前に到着し、一番のりで受診票を提出した。だが、私よりあとに来た人たちが次々と診察室に呼ばれ、私ひとりがいつまでも待合室に取り残されている。

少しあせりだした私は、産婦人科外来の受付にいる看護婦さんにたずねた。

「朝いちばんから待ってるんですけど。私の順番は、まだでしょうか？」

「初診の方は、どんなに早く来ていただいても最後になるんですよ。ご予約のある患者さんが優先ですから。あと1、2時間はお待ちいただくかもしれませんね」

約束の時間がせまっていた。これ以上待つと完璧に遅刻しそうだ。

私は一瞬、帰って別の日に出直そうかと考えたが、結局、そのまま待つことにした。

今日を逃(のが)したら、次はいつ病院に来られるかわからない。それに、私の体は、仕事だの約束だのと言っていられないほどの変調をきたしていた。

やっぱりどうしても、今日診てもらうべきだ――。

そう考えた私は、午後の約束をキャンセルするために、電話をかけにいった。

１９９４年３月25日――。

私は東京・湯島にある東京医科歯科大学医学部附属病院の産婦人科外来をたずねていた。

私には、高血圧症と、慢性化した腎盂腎炎の持病があり、ずっと内科に通っていたが、今回初めて産婦人科に回された。

産婦人科の外来は、近代的な造りの新棟の３階にある。私は、内科の丸茂文昭教授の紹介状をたずさえ、麻生武志教授の診察室のドアを開けた。

麻生教授の内診は、10分ほどで終わった。

内診台から降り、衣服を身につけてから隣の診察室に入ると、麻生教授がデスクに向かってカルテを書き込んでいるところだった。

私は、デスクの横にある患者用の小さい丸椅子に腰かけて、言葉を待った。

麻生教授は、まだカルテを書き続けている。

〝もしかしたら、私に伝えるべき言葉を探しているのだろうか……？〟

ふと、そんなふうに感じた。

腎盂腎炎（じんうじんえん）■腎盂腎炎は、細菌によって腎実質（じんじっしつ・尿をつくる部分）や腎盂（じんう・尿をためる部分）に炎症を起こした状態で、症状や経過には個人差があります。腎盂腎炎は、腎臓そのものや、尿管、膀胱、尿道といった全尿路のどこかに流れをさまたげるような病気、また細菌が感染しやすいような状況が起これば発症しやすくなります。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

麻生教授の横顔からは何も読み取れなかったけれど、私には〝予感〟があった。
間もなく、若い医師が急いだ様子で、麻生教授のデスクまでやって来た。
それから、麻生教授にメモを渡し、報告をした。
「4月中ですと、現在あいているのは、21日と、29日ですね」
麻生教授は、若い医師からそのメモを受け取ったあとで、こちらを振り向き、私の顔を正面から見つめた。先に口を開いたのは私のほうだった。
私には、もう自分の病名がわかっていた。
「やっぱり……手術するんですね？」
「いちばん近くで、手術室があいているのは、ひと月後の21日と29日ですね」
たぶん麻生教授も、私が気づいていることを、承知なのだろう。病名も何もなしに、いきなり手術のスケジュールの話になった。
「すみません。いろいろ、都合がありまして……。私、その日に手術は無理です。
4月中に入院も難しいのではないか……と。
できたら手術は、2か月くらい先に延ばしていただきたいんですが……」
麻生教授は、私の返事を聞くと、腕組みをして一瞬後ろに反った。
ひどく意外な答えだったのかもしれない。それとも、自分の病気を正確に把握していないと、思われたのだろうか。

麻生教授は姿勢を正し、正面から私の顔を見据えてこう言った。

「悪性腫瘍は、放っておくと、どんどん広がります。

これは、告知するとかしないとかの問題ではなく……あなた自身が自分の状態をよく知って、闘っていかなければならない病気なんです」

麻生教授の言うことは、間違っていない。今の私は、何をおいてもすぐに病院に入り、一刻も早くガンの治療をスタートするべきだ。ところが、このとき私の頭を占めていたのは、自分の仕事のスケジュールのことだった。

ここに来るまでに自分の病気をガンかもしれないと、考えなかったわけではなかった。産婦人科を受診しようと決めたときから、ガン告知はあり得ると想像していたのだ。

だが、今日の診察結果がシリアスであればあるほど、今の私には、それに備えてさまざまな手を打つための、時間が必要だった。

「先生、私は自分の状態がわからないで言っているわけじゃありません。

私は小さい会社をやっていて、扶養家族が何人かいます。責任のある仕事もいくつか、かかえていて……。たとえ、ガンだ、手術だと言われても、自分ひとりの都合で、今すぐにこうします、とは決められないのです」

なんとかわかってもらおうと、私は一生懸命説明した。

だが、わかってもらうのは無理かもしれない、とも思った。

よく考えれば、自分の命以上に大切だという、仕事や都合があることのほうがおかしいのだ。ガン告知を受けたときに、仕事を最優先で考えようとする私の発想が、そもそも変なのだ。

麻生教授は、深追いはしてこなかった。

「いろいろ事情はおありでしょうが……。まあ、医者はあくまでもアドバイスする立場にしかありませんから」

過剰に踏み込んでくることもなく、だが決して冷たくもなく、ゆっくりと、深く響く声で麻生教授は言った。

「ただし――。日単位とは言いませんが、あなたの病気は月単位で、確実に悪くなっていきます。治療が遅れれば、それだけ治るのも遅くなります。先延ばしにするほど、危険が増すことを忘れないでください。

もっとも……今の状態では、あなたが望まなくても、入院せざるを得ない状況が起きるかもしれませんよ。

子宮口にさわるだけで、ガンの組織がぽろぽろこぼれてくるくらい進行してますから、出血しやすいんです。近いうちに大出血するかもしれない。

もし、そういう状態になったら、迷わず救急車を呼んでください」

もしこれがガンだとしたら、すごく足がはやいやつだ。
だったらじたばたしても、始まらない。

最初のきざしは、前の年の11月だった。

月のあたまに始まった生理が、予定を過ぎても、なかなか終わらなかった。

ぽつりぽつりと、ごくわずかな出血がいつまでも続き、ようやく切れたときは、終わるはずの日を6日も過ぎていた。

「また、あれかな」

私は、あまり深く考えてはいなかった。

7月に行ったK大学付属病院で、不正出血については、特に心配はいらないと言われていたせいもある。

「だいぶ大きな子宮筋腫がありますね。

温州みかん、くらいかなぁ。たぶん、不正出血の原因は、それでしょう」

K大学付属病院婦人科の若い医師は、指を輪にして筋腫の大きさを示しながら、私に向かってそんなふうに説明してくれた。

「私、7～8年前から、たまに不正出血があったんです。

子宮筋腫（しきゅうきんしゅ）■子宮の筋層の部分に発生する良性腫瘍で、35歳以上の女性の15～30パーセントに発症するといわれています。筋腫は無症状のものも多く、治療が必要になるのは、かなり大きくなった場合や過多月経や不正出血など、異常出血の原因となった場合です。出血量が増えたため、動悸、息切れといった貧血の症状で来院するケースも多いようです。

それに、生理のときの血液が、このごろ水みたいに薄くなってきて……。
私の母も祖母も、子宮ガンで子宮摘出手術を受けているから、もしかしたらその体質を受け継いでいるんじゃないでしょうか」
子宮ガンの家系だから……と、あれこれ不安を並べる私に、
「あなたの出血は大丈夫ですよ。そんなに心配だったら、半年に一度、検査にいらっしゃい。これから妊娠する予定があるとか、出血が多くなって貧血が出るとかだったら、筋腫を切らなくちゃいけませんけど。
今くらいの程度なら、そのまま放っておいたほうがいいと思います。もっと年をとれば、筋腫からの出血も自然におさまりますから」
と、K大学病院の若い医師は言った。
それからまだ4か月しか経っていない――。
出血が増えたといっても、ほんのわずかだ。特に、ほかの症状が加わったわけでもない。
病院に行くなら、もう少し様子をみてからにしよう――。
私は、心の中に芽生えた不安を払いのけ、自分にとって、都合よく考えようとした。
翌月の生理は、いつもより早く始まり、前の月よりもっと終わりが長引いた。
年が明けてからは、さらに出血が増え、「変だぞ」という気持ちが、だんだん私の中でふ

くらんでいく。

子宮筋腫が見つかったのは、私が25歳のときだった。7～8年前から不正出血を見ることもあったが、それもわずかなものだ。なぜここにきて急に増えたのかが、不思議だった。

この出血は、本当に子宮筋腫のせいだろうか――。

漠然と私は、ガンかもしれないと考えた。それでも私は病院に行かなかった。

ちょうど私は、月刊誌『Ｏｇｇｉ』で連載している『素顔のハリウッド』というドキュメントレポートのため、アメリカに行くことが多く、すさまじい忙しさのまっただなかにあった。私には、目先の忙しさを理由に、嫌なことを先延ばしにしよう、という気持ちがあったのかもしれない。

たった4～5か月で、急に悪化するくらいだから、もしもこれがガンだとしたら、すごく足がはやいやつだ。だったら、じたばたしたって結果にたいした違いはないだろう。

まず目先の仕事のノルマを片づけよう。そして、5月になって仕事が一段落したら、病院に行こう――。

そんなふうに決めていた私が、不安に耐えきれず、東京医科歯科大学附属病院の麻生教授をたずねることにしたのは、3月の末だった。

いつが生理で、いつがそうでない日なのか――。

そのときには、すでに区別がつかなくなっていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook